



小町変相

小町変相

円地文子

講談社版

小町変相

昭和四〇年五月一〇日第一刷発行

著者 円地文子

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽町三ノ一九

電話 東京(九四二)一一一一(大代表)

振替 東京 三九三〇

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 図書印刷株式会社

定価 六五〇円

こゝろ

© 円地文子 昭和四〇年

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

第一章 花の色

五

第二章 通せんぼ桐

四五

第三章 小町私見

七二

第四章 渴き

九五

第五章 淹めぐり

一三五

第六章 薄

一九三

小町
変相

挿画 石田重子

第一章 花の色

後宮麗子^{うしろぐ}はベッドの中でうつらうつらしてゐた。一度ふつと眼を見開いて、カーテンの裂け目から明るい光の忍びこんであるのを見さだめた後なのでほんとうに眠つてゐるわけではなかつたが、身体中の節々がとろけて骨なしになつたやうなけだるさが不思議に快く、大海の波にゆすられて浮身^{うきみ}してゐるやうに両手を投げ出したまゝ淡い眠りにいつまでも身を委せてゐたかつた。

さうだ、今日は芝居はもうなかつたのだと思つた。昨夜、混成劇団の千秋楽の後、お別れパーティーだと言ふことで、柳橋の「出雲」に行き、男女合はせて二三十人が深夜まで騒いでゐた大川べりの座敷のざわめきがふつと浮び上つて来るかと思ふと、それに重なるやうに真白いベッドの中に眠り姫のやうに横たはつて「アルマン」「アルマン」と細い声で男の名を呼びつゞけてゐる椿姫がそのまゝ自分であるやうな夢うつゝの錯覚に他愛なくさまよつて行つた。

意識を朦朧と霞ませてゐる幾重もの紗膜の底に、何となく重たく沈みこんで溶けない異物がある。はて、これは何だつたらうと麗子は覚めきらないまゝに、恰かもそのあたりに重たい塊りがあるかのやうに片手をゆつくり胸の上に乗せた。

劇場一ぱいに湧き溢れる旺んな拍手喝采の騒音がゆつくり滑り落ちた厚い緞帳を越えて、劇の終つた殺風景な舞台に答へを求めて来る。今し方、臨終の悲劇に涙をしぼらせた椿姫が青い隈取りの扮装のまゝ床からはね起きて、裳裾をつまみ、アルマンと手をつないで舞台の中央に立つ……幕がもう一度上るとわれ返る拍手の波……

いや、これではないと麗子は首を振つた。一つの芝居の主役を勤めてゐても、日によつて演技のうまく行かないこともあるし、見物の調子のびつたり来ない日もある……しかし、昨日の最終の幕はどつちも調子が出て、役者冥利、心のゆく劇の盛り上り方だつた……すると、この胸の底の沈澱物……それが所謂「寝ざめの悪さ」といふものであることを、麗子はこの数年やうやくうなづくやうになつてゐたが……はその後に心にしのび入つた曲者に違ひない。

寝ざめの悪いと言ふ言葉を、多くは他人に対して、非情な行為をした後味のやうにいふけれども、麗子にはその実感はむしろ外から自分を冒して来るものの理不尽な圧力に抵抗する怨みや呪ひの闘ひであつた。その嫉妬や呪咀は、心の奥所からじわじわと湧き出して来て、寝ざめ方の夢うつゝの間に麗子の弾力のうせた乳房の間を、幽霊の手のやうに冷たく撫でま

はすだけで、いつも捌け口を見出さぬまゝに、呑みこまれて行くのであつた。

あ、あの時の……と麗子は口の中でつぶやいた。

眼の前に薄樺色^{うすかは}の腹側^{はらがは}をふくらせ、化粧塩をほどよく焦がして尾鱗をぴんとはね上げた鮎の塩焼きがあつた。

「いい匂ひですね。こんな香氣^{かうき}の強い鮎は今年はじめてだ……」

麗子の隣にゐた新派の老け役の須坂が食通らしくうれしそうに眼を細めて麗子に言ひ、近くにゐた「出雲」の女将の梅乃に声をかけた。

「梅乃さん、これ……どこ？ 長良川？」

「いゝえ、周山なんですよ。」

と梅乃が答へた。

「周山ついていふと、あの京都から若狭の方へ行く……」

「えゝ、えゝ、周山街道、あの辺の川で捕れるのが苔の工合ひですかしら、大層匂ひがよくつておいしいつて評判なんで、取りよせてますの……尤も毎日とは行きませんですけど、今夜のは飛行機で夕方届いたんですわ。」

梅乃は昔女優だつた時代からの顔馴染みなので、劇界のお客には改つた口はきかなかつた。それだけに梅乃の経営してゐる「出雲」はわがまゝがきくので芸能関係の会合が多いの

である。

八

「さうですか。私もよく京都に行くとか鮎を食ふけれど、周山の鮎つてのははじめてだ。」

須坂がさう言つたのを皮切りにあつちでもこつちでも鮎の匂ひが芳しいとか味がこまかいとかいふ讚め言葉で一しきり座が賑はつた。麗子も勿論その会話に加はつて、周山の鮎の濃い風味を賞美してみせたが、実際には麗子の嗅覚にはその水苔の匂ひの鼻をつく芳しさは、ほんの仄かにしか漂つて来なかつたのである。麗子はこの一兩年、匂ひについて感覚が急に鈍くなつたのを時々気づいてゐたが、人に話したことはなかつた。耳や眼のうとくなるのと違つて、実際それはごまかしい種類の老衰であつたが、今夜のやうに鮎の香氣の快く鼻を打つて来ない不快さにはまだ出あつたことがなかつた。

口数の多い都会育ちの集りだけに、鮎の匂ひのよさを珍重する声がいくらか大袈裟にざわめき立つ中に交つて、同じやうなほめ言葉を上手に口にしてゐるだけに、その時麗子にはしみじみ、食道楽の自分から、又一つ鮎といふ季節魚の醍醐味が奪ひ取られて行く無慈悲さが身にしみてわびしく感じられた。

「さうさう……それだけぢやないわ……まだあとがあつた……」

麗子は今度こそもうすっかり覚めきつた眼を見開いて、ひとりごとを言つた。

同じ宴会で、もう大分席が乱れ、上戸の癖の出るころであつた。来年の今頃にもかういふ

組合はせで又芝居をやらう、それには皆のスケジュールも早くにきき合はせ、出し物にも一工夫なくてはなるまいと歌舞伎の立物の紅車が言ひ出したのがはじまりで、本氣と冗談をからみ合はせたやうなこの社会独特の話術で、いろいろな思ひつきの出る中に言ひ出しへの紅車が、

「どうだい、いつそ、後宮さんの小野小町でわれわれを六歌仙といふお見立てのドラマを誰れかに書いて貰つちやあ。」

と何気なしに言つてのけた。

「後宮さんの小町はいいが、まさか、僕たちが大和屋さんや音羽屋さんの真似をして清元や長唄の地でとことんやらされるわけぢやありませんまいね。」

新劇の二枚目でこの芝居でアルマンを勤めた松山といふ俳優が言つた。

「いやものの例ですよ。まさか六歌仙をそのまゝ……」

と紅車はそこまで言つて、氣を変へると、

「しかし後宮さんの小町といふのは悪くないな。私は子役時分に前の沢瀉屋の『通小町』つていふ新舞踊を見たが、よかつたなあ……後宮さん一つ、誰れかに新しく書いて貰つて、小町をやりませんか。」

と麗子の方を向いて言つた。

「さうね、私も随分日本の歴史で有名な女の人を勤めてゐるけれども小町はまだしたことがないわ。さうさう子供の時分に踊の温習会に、関ノ扉の小町姫をやつたことがあるきりよ。」

「小町つて一体何です。」

と向ふ側の少し離れたところにゐたやつぱり新劇出の若いテレビ男優が言つた。

「小町つて小野小町さ。有名な美人で歌詠みだよ。」

「そりや知つてますよ。昔は何とか小町つて言へばその辺で評判の美人のことをいつたんでせう。」

「さうだよ。つまり今のミス何々と同じさ。」

と松山が言つた。

「そりや知つてゐるけれどもう一つ小町つていふと、ある符牒オウシに使ひますね。ありや何か謂いはれのあることですか。」

「なるほどね。」

松山も紅車も、ちよつと鼻白らんで曖昧にうなづいたただけだったが、須坂は平氣な顔で、
「小町つていふのは女の形をしてゐて、女ぢやあない、つまり穴なしのことを言ふんだよ。
あんたのサインといふのはそのことだらう。」

といつた。

「さうです。」

と問ひを出した男の方が今度は同席の女たちを憚つて洗面を作つた。

「その小町の謂れがわからないといふの……そんなら教へて上げよう……ちよつと、横町の隠居といふところだがね。」

須坂は酒の入つてゐる高調子で話し出した。

「先刻、紅車さんのお話にあつた『通小町』ね、あれが即ち小町の異名の元だよ。深草少将といふのが小町の美人なのに惚れて言ひよるけれども、歌でばかりうまいことを言つてゐて、一向承知しない、お終ひにそのお言葉が真実なら、百日の間夜毎に通つて来て下さい。百夜目には必ず一つになりませうと言つたので少将は毎夜々々、雨の夜も嵐の夜も通ひつゞけて九十九日といふ晩に雪に凍えて、死んでしまつたといふのだ。男にそんな思ひをさせるほどの情の剛こはかつたといふ小町は、恐らくほんとうの女ではあるまい。あれは穴なしだつたに違ひないといふのが世間の人の推測さ、男をあやなしてばかりゐて、たのしませなかつた報いで小町は婆さんになつてから、おちぶれて乞食をして歩いたといふことだ。」

「それが卒都婆小町つていふのね。」

と女優の一人が符牒から話の外づれたのにほつとして言つた。

「私、暇があればお能をみることにしてゐるけれど、卒都婆小町も関寺小町も一度も見たこ

とがないんです。卒都婆小町は殊に重い曲なんですつてね。」

「私は戦争の最中に、水道橋の能楽堂で、桜間弓川さんの卒都婆を拝見しましたよ。」
と梅乃が言つた。

「私にはお能はわからないんだけど、亡くなった主人に連れて行かれてね、笠をかむつて出て来たところのよかつたこと……あの姿がまだ眼に残つてゐるわ。」

梅乃ははるかなものを見やるやうな眼つきになつた。麗子にはその眼が変に若々しく厭らしく映つた。

「後宮さん、ほんとうに一度小町の一代記をやつて御覧なさいよ。あなたならきつと若いところから晩年まで見事に演りこなせるわ。」

梅乃が何げなくさういつた時、少し離れたところにゐた演出者の風早が酔つた声で、

「そいつはおもしろいや。後宮さんの小町なら脚本は是非信楽高見に書いて貰ふんだね。」
と言つた。

一同はそこで又がやが言つたが妙に弾まない調子で何となく他の話に焦点がうつつて行つた。麗子の内に先刻からじわじわ蒸れて来てゐた不快さがはつきりした凝りになつたのは、その時であつた。

小町の異名の話が若いテレビ俳優の口から出て、須坂の滑つこい舌に乗り出したところから、

麗子は須坂が自分に当てつけてゐるとはゆめにも思はないのに、強ひて一座の者が自分を揶揄してゐるやうな錯覺をつくり出してゐた。

若い時代に美貌と才能をたのんで、言ひよる男の数々をなまめかしい歌の主管であやなし、自分の誇りを満足させるだけで、男の側に女を愛す歎びをつひに一度も与へなかつたといふ小町も昔の自分に満更、縁のないことはないが、それ以上に数年前女だけの疾む癌に取りつかれて、子宮を全部多ぐり取つてしまつた麗子にとつては小町の名が性的不能の符牒に使はれ、一種の嘲笑の対象になつてゐるのが、他事よそごとに聞き過せない屈辱感であつた。

喋り散らしてゐる男達は兎も角として、尠くとも梅乃だけは小町の話の出たときから、意地悪くそのことに気づきほくそ笑んでゐると思はれるだけに、眞実らしく眸を鍾あつめていふ梅乃の言葉は麗子の心に深い爪痕を残した。

「さう言へばあの人、この頃ばかりに若返つてゐるわ。」

麗子はさうつぶやいた時、もうするりとベッドをぬけ出して、朱色の派手なカーテンをひきあけた。

外には埃つぽく白んだコンクリートの道と大小の箱のやうな殺風景な鉄筋建築の向ふに神宮内苑の森がそだけ木深く眺められた。

麗子がそこに行つたのは勿論外を見る為ではなく、窓際にある豪華な三面鏡に寝さめの素

顔を映して見る為であつた。可愛らしい小鳥と花模様のゴブラン織のストールに低く腰を降ろし、麗子は銀張りのフランス製の手鏡をとつて、舞台人らしい細心な瞳を鏡の中に集中した。

崩れはじめた黄薔薇の花弁のやうに緻密なきめがそのまま湿ひを失つて縮みかけた皮膚がまづだるさうに眼に入つた。皺は額にも薄く見えるが、何といつても一番眼につくのは明眸を羨まれた大きくゆつたりきれた二重瞼の周囲で、眸には今猶恋を語るにふさはしい若々しい艶がなまめいてゐるだけに化粧をしない素顔の上瞼と眼尻を無慚に切り彫んでゐる皺と下瞼の縁の不自然な袋型のむくみは調和のとれない醜さを露出してゐる。小鼻の両側に見える窪みはまだ、老人皺とまでは行かないが、玉子型に、形よく彫まれて小さい頤へきつちりはまりこんで行く筈の頬にも、不確かな凹凸が出来て、唇の端と頬の境が布団を糸で綴じたやうに奇妙にくゝれてゐる。

それでも顔の頹廢は首筋のそれに較べればまだ蔽ひかくせないほどではなかつた。麗子はうす紫のネグリジェから脱け出した長い首を、思ひ切りのばして、手鏡の手をゆつくりうる横にまはしてかざすと、三面鏡の一面が外の光を受けて白く輝いてゐる面に、大きい鶴のやうに見事な首をのばした斜め後ろ向きの半身像がうつつた。

残念なことに、この鶴は老いてゐた。立派な長い首ではあつたが、もうその上は毛はぬけ